

修士論文発表（要旨）

2015年1月

秘密開示状況に対する認知および秘密を開示される者の態度と秘密開示後の感情の関係性

指導 種市 康太郎 准教授

心理学研究科  
臨床心理学専攻  
213J4005  
菊谷 知美

Master's Thesis (Abstract)

January 2015

The Effect of Perceptions regarding the Disclosure of Secrets and  
the Attitude of the Recipient and the Secret Discloser's Feelings following Disclosure

Tomomi Kikuya

213J4005

Master's Program in Clinical Psychology

Graduate School of Psychology

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Kotaro Taneichi

## 目 次

1. 問題と目的 .....	1
2. 方法.....	1
2-1. 予備調査 .....	1
2-2. 本調査 .....	1
3.結果と考察 .....	1
引用文献 .....	1

## 1. 問題と目的

自己開示(self-disclosure)とは、自分自身のことを他者に伝える行為であり、他者が知覚し得るように自身を示す行為である(Jourard, 1971)。また、榎本(1997)はこれを踏まえつつ、自己開示を「自分の性格や身体的特徴、考えていること、感じていること、経験や境遇など自己の性質や状態を表す事柄を他者に話すこと」としており、本研究では榎本(1997)の定義を採用することとする。

ところで、心理臨床場面を考えた場合、そこでの自己開示の性質は一般的な場面のものとは異なる。心理臨床場面では、家族や友人などといった親密度の高い人に自己開示をするわけではない。また、開示内容に関しても、他の人には話せない「秘密」の開示が必要となることが多い。これまでの自己開示研究では、日常的な自己開示について多く取り扱ってきたが、そのような研究での自己開示場面は、心理臨床場面とはその性質が異なっていることから、心理臨床場面での自己開示の特徴を理解するには不十分であると考えられる。

そこで、本研究では心理臨床場面の自己開示の主な特徴の一つである秘密の開示に注目する。秘密の開示は、一般的な自己開示よりもリスクを伴い、開示後によりネガティブな感情が生じやすいと考えられる。したがって、秘密の開示の特徴、例えばそのリスクや感情を検討し、秘密の開示の際にネガティブな感情を生じにくい条件を知ることができれば、今後の心理臨床活動における援助に役立てられると考えられる。そこで、本研究では、1)秘密開示後の感情を簡便に測定できる尺度を作成すること、2)自己隠蔽傾向、秘密開示状況に対する認知的評価、被開示者の共感的態度と秘密開示後の感情の関連について検討することを目的とする。

## 2. 方法

### 2-1. 予備調査

首都圏の私立大学生・大学院生 15 名を対象に、秘密開示後の感情に関する自由記述、フェイスシートが記載された質問紙調査を行なった。教示は「あなたが現在『秘密にしていること』を 1 つ思い浮かべてください。その秘密を打ち明けたときに感じる気持ちを、できるだけたくさん挙げてください。」とし、自由記述形式で回答を求めた。分析は、KJ 法により尺度の構成を行なった。

### 2-2. 本調査

調査は、首都圏の私立大学生約 470 名に配布し、271 名から回答が得られ(回収率 57.7%)、有効回答は 240 名(有効回答率 88.6%)であった。質問紙の構成は、①自己隠蔽傾向尺度(河野,2000)、②秘密開示状況に対する認知的評価尺度(鈴木・坂野,1998 を改変)、③秘密開示後の感情尺度、④フェイスシートであった。なお、③は、秘密を打ち明ける際の聞き手の態度について「とても共感的」「まあ共感的」「あまり共感的でない」「全然共感的でない」という 4 種類の教示を行なっているため質問紙も 4 種類あり、調査用紙配布時にはそれらをランダムに配布した。分析は、まず、予備調査で作成した秘密開示後の感情尺度について因子分析を行なった。次に、各尺度間の相関係数を算出し、関連を検討した。最後に、秘密開示後の感情を基準変数、残りの尺度得点を説明変数とする重回帰分析を行なった。

## 3. 結果と考察

秘密開示後の感情尺度作成では、「安心感・開放感」「心配」「恐怖」の 3 因子が抽出された。しかし、因子としては抽出されなかったものの「後悔する」「不安になる」などが項目として含まれていた。本研究では 3 因子のみが抽出されたが、それぞれの項目間の相関が高かったために、それら

の因子の中に様々な感情が含まれる結果となったことが考えられる。

各尺度間の相関係数では、第一に、「自己隠蔽傾向」得点が高い場合、認知的評価の「脅威」得点が高く、「対処可能性」得点は低い傾向がみられた。また、感情尺度の「心配」「恐怖」得点が高く、「安心感・開放感」は低い傾向がみられた。第二に、「脅威」得点が高い場合、「心配」「恐怖」得点が高い傾向がみられた。一方で「対処可能性」得点が高い場合、「心配」「恐怖」得点が低い傾向がみられた。第三に、「被開示者の共感的態度」得点が高い場合、「安心感・開放感」得点が高く、「心配」「恐怖」得点は低い傾向がみられた。

秘密開示後の感情を基準変数とする重回帰分析では、「安心感・開放感」「心配」「恐怖」に共通して示された要因として、自己隠蔽傾向との関連が大きいことが示された。このことから、開示者の自己隠蔽傾向が高いかどうか、秘密開示後の感情と大きく関連していることが明らかになった。また、特に「心配」「恐怖」に対する要因として、秘密開示状況に対する「脅威」が大きく関連していることが示された。このことから、開示者の秘密に対する評価や開示することへの脅威について、被開示者が理解することが重要であることが考えられる。さらに、安心感・開放感について男女差がみられたことも特徴であった。秘密開示後に安心感・開放感が生じるために、女性は、相手がどのような態度で聞いてくれるかが重要であり、男性は本人の自己隠蔽傾向の強さが重要であることが示された。

このように、本研究の結果は、開示者が秘密開示後ネガティブな感情が生じないために、またポジティブな感情が生じやすくなるための被開示者の態度について考える際の一助となるであろう。

## 引用文献

榎本博明 (1997). 自己開示の心理学的研究. 北大路書房.

Jourard S. M. (1971). *Self-disclosure: An Experimental Analysis of the Transparent Self*. New York: Wiley-Interscience.

河野和明 (2000). 自己隠蔽尺度(Self-Concealment Scale)・刺激希求尺度・自覚的身体症状の関係. 実験社会心理学研究, **40**, 115-121.

鈴木伸一・坂野雄二 (1998). 認知的評価測定尺度(CARS)作成の試み. ヒューマンサイエンスリサーチ, **7**, 113-124.